Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

Incidence of deep vein thrombosis in patients undergoing breast reconstruction with autologous tissue transfer

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 此枝, 央人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032626

主 論 文 の 要 約

Incidence of deep vein thrombosis in patients undergoing breast reconstruction with autologous tissue transfer.
（邦訳：乳房再建患者における深部静脈血栓症の発生率）

東京女子医科大学形成外科学教室
（指導：櫻井裕之教授）㊞
此枝　央人

Phlebology 第３２巻　第４号　２８２頁～２８８頁(平成２８年１１月１９日発行）に掲載

【目　的】

自家組織を用いた乳房再建手術は深部静脈血栓症（以下 DVT と略す）発生危険因子を複数含んでいる。しかし同手術後 DVT の発生頻度については詳細な報告はなかった。そこで我々は同手術を行った患者を対象に超音波画像診断による同術後 DVT の発生頻度の調査及び DVT 危険因子について検討を行った。

【対象および方法】

2011 年 4 月から 2014 年 4 月までに東京女子医科大学形成外科で自家組織を用いた乳房再建手術を行なった３５名の患者を対象に検討を行なった。術前に下肢静脈エコー施行して両下肢の総大腿静脈、浅大腿静脈、深大腿静脈、膝窩静脈、前脛骨静脈、後脛骨静脈、腓骨静脈、腓腹静脈、ヒラメ静脈の血管径の測定および陳旧性 DVT の有無を確認した。乳房再建手術後 DVT 発生危険因子の評価として術式と Caprini の危険因子（年齢、ＢＭＩ、鬱血性心不全、ホルモン療法、炎症性腸疾患、中心静脈カテーテル留置、DVT の既往、腎不全の有無）について検討を行った。周術期の DVT 予防として弾性ストッキングの着用と症状安静期間中の間欠的空気圧迫法行った。それに加えて早期離床を促した。術後 3 日目、7 日目、14 日目に下肢静脈エコーを用いてＤＶＴの有無を確認した。

【結　果】

術後DVTは１１名（３１．４％）の患者に発生していた。そのうち１名は肺梗

塞の併発を認めた。１１症例とも無症候性下腿限局性DVTであった。8名は術後3日目に、3名は術後7日目にDVTが発見された。手術術式は１０例が腹部からの遊離皮弁移植術で他の１例が背部からの有茎皮弁移植術を行っていた。リスク因子の検討において総大腿静脈径が大きい患者に有意に静脈血栓が生じていたことがわかった（P<0.05）。

【考　察】

今までの報告では乳房再建後 DVT の発生率は 0.5-2.2%と言われていた。一方われわれが低侵襲かつ診断率の高い静脈エコーを用いて DVT 診断を行なった所実際には 30%以上の患者で DVT が発生していることが分かった。この発生率の乖離は DVT 患者のほとんどが無症候性 DVT であるため今まで見過ごされていたためと考えられる。自家組織を用いた乳房再建手術後 DVT を予防するためには予防的抗凝固療法を導入することも考慮すべきである。同治療は合併症として血腫形成や移植皮弁の壊死などが危惧される。しかし他の研究結果から予防的抗凝固療法を行うことによるこれらの合併症の発生率は優位に向上することはないとされている。

【結　論】

自家組織を用いた乳房再建術後の DVT 発生率は比較的高いことが分かった。危険因子として総大腿静脈径の大きさのみ同定できた。しかしこれのみを基準に DVT 発生予測を行うことは実際には困難である。以上より同手術後はヘパリンなどの薬物による予防的抗凝固療法を考慮することが望ましいと考えた。